

クラウディオ・モンテヴェルディ

世俗音楽と教会音楽 両分野で時代を牽引した 当代随一の“二刀流”

初期バロック最大の作曲家クラウディオ・モンテヴェルディは、今から450年前の1567年、北イタリアのクレモナで薬剤師をしていた父のもとに生まれた。日本で言えば、ちょうど織田信長が浅井長政と同盟を結び、伊達政宗が誕生した年（実は同い年！）である。クレモナの大聖堂楽長であったインジェニエーリから音楽の手ほどきを受けたモンテヴェルディは、早熟の才を發揮し、わずか15歳の時にモテット集を出版している。そして、マントヴァの宮廷にヴィオラ・ダ・ガンバ奏者兼歌手として雇われた1590年までには、マドリガーレ集を第2巻まで発表している。

マントヴァの領主ゴンザーガ家は14世紀からこの地を治めていたが、15世紀末にフェッラーラのエステ家と姻戚関係を結んで以降、ジャケス・デ・ヴェルトら優れた音楽家を集めるようになっていた。宮廷礼拝堂での典礼音楽に加え、さらに盛んに演奏されたのが世俗音楽で、モンテヴェルディも、君主ヴィンチェンツォに随行して訪れたフェッラーラの新しいスタイルの音楽に大いに影響を受け、またルカ・マレンツィオらによる当時流行していた様式を取り入れつつ、歌詞に即した表現豊かなマドリガーレへと徐々に書法を変えていった。

重版されるほど好評だった《マドリガーレ集第3巻》(1594)から10年近くの間を経て出版された《同第4巻》(1603)は、1590年代から書き溜めてあった作品をまとめたものだが、ここでは均整のとれたルネサンス的な滑らかな動きは次第に影を潜めている。歌詞はグアリーニやタッソによるものが多く、ほとんどは、愛、欲望、裏切り、絶望などを歌っているが、そのテキストはともかく徹底してエロティックである。表面的にも男女の性愛を歌っているのだが、さらに歌詞は隠喩的な裏の意味を持ち、いわば“わかる人にはわかる”官能の世界が描かれる。これらのマドリガーレは、この手の欲望には余念がなかったマントヴァ公のサロンやフェッラーラの宮廷で好んで演奏されただろう。一流音楽家を集めての「高貴にして卑猥な貴族の楽しみ」といったところだろうか。（余談だが、今から20年近く前、現存するマントヴァの宮殿の建物で壁の中に隠し部屋が

見つかり、そこがモンテヴェルディの作品も演奏されたスペースだったのではないかとされている）1605年に出版した《マドリガーレ集第5巻》では、初めて通奏低音付きのマドリガーレを世に問い、高い評価を得たが、この曲集の序文で、自らの新しい作曲法を「第二作法 *seconda prattica*」と呼び、彼の技法に批判的であったボローニャのアルトゥージら保守的な人々への反論を述べている。

マントヴァ時代、妻の死など私生活では波瀾万丈であったモンテヴェルディだが、この時期に初めての歌劇《オルフェオ》(1607)やたびたび再演された記録が残る《アリアンナ》(1608)を書いている。レチタティーヴォ風のモノディ（独唱）やヴィルトゥオーゾ的なアリア、合唱、器楽によるリトルネロなど多彩な音楽形式を盛り込んだ作品は大成功を収め、オペラ作曲家としても名声を不動のものとしていった。

さて、本日演奏される〈おお イエス、わが命よ O Jesu mea vita〉〈おお きらめく星よ O stellae coruscantes〉〈処女マリアは聖なる火をおこし Ardebat igne puro〉の3曲は、第4巻に収められた5声マドリガーレの歌詞をラテン語宗教詩に置き換えたコントラファクタ（替え歌）である。ルネサンス期より、流行している世俗曲などを借用素材としてミサ曲を作ることは盛んに行われていたし、このようなコントラファクタの習慣は珍しいものではなかった。教会音楽と世俗音楽の境界線は、現代のわれわれが考えるよりもはるかに曖昧なものだったのである。

厳格な対位法よりも劇的で自由な表現が優先され、各声部はときに優しいため息のごとく、ときに切迫して感情過多に語り、激しく動く旋律や大胆な不協和音が聴き手の不意をつく。詩のニュアンスを繊細に読み取り、言葉と音楽を結合していくモンテヴェルディの力量がいかに発揮された、傑作ぞろいの曲集である。たとえば、マドリガーレ〈星に苦しみを打ち明け Sfogava con le stelle〉に基づくコントラファクタ〈おお きらめく星よ〉では、ファルソボルドーネと呼ばれる和音上での朗唱と対位法的展開が交互に現れ、劇的な効果を生み出している。オリジナルの言葉の抑揚や構文を極力活かすように、注意深くラテン語のテキストが選択され、替え歌の違和感を感じさせない巧みなパロディ作品となっている。官能的な愛の歌は、祈りの言葉へと置き換えられ、かつてなく熱く信仰が語られる。原曲の歌詞の内容

を知る者にとっては、このような音楽が教会という空間で鳴り響くこと自体いささかスリリングだっただろうし、濃密な色香をまとったハーモニーは、まさに聖と俗のはざまにあって、ギリギリのところで宗教曲の枠組みに踏みとどまっていた。こうしたコントラファクタの存在は、北イタリアの諸都市の自由な空気や時代精神を物語っているのかもしれない。

これらのコントラファクタの作者であるミラノの詩人アクイリーノ・コッピーニは、アンブロジアーナ図書館を設立したことで知られる大司教、フェデリコ・ボッロメオ枢機卿に仕え、パヴィア大学で修辞学の教鞭も執っていた人物で、マントヴァ時代のモンテヴェルディとは個人的にも親しかったようだ。コッピーニは、1607～09年にかけてモンテヴェルディのコントラファクタ集を3巻出版している。なお、コッピーニによる作品だけでなく、モンテヴェルディの場合、17世紀半ばまでに他にもイタリア語（別の歌詞）、ドイツ語、オランダ語のコントラファクタが出版されており、ヨーロッパ各地に彼の名声が届いていたことがわかる。

友人関係にあったコッピーニによるコントラファクタは、作曲家自身も気に入っていたようで、後に自らもモノディ様式のコントラファクタ〈聖母の涙 *Pianto della Madonna*〉を作っている。この曲はもとも歌劇《アリアンナ》(台本と一部の音楽のみ現存)のハイライト場面〈アリアンナの嘆き〉として書かれたラメントであったが、後に、十字架の下で涙するマリアを歌ったラテン語の歌詞（作者不詳）がつけられ、《倫理的・宗教的な森》(1640/41)に収録されている。一方、《マドリガーレ集第6巻》(1614)には〈アリアンナの嘆き〉を5声版に改作したバージョンが収録されている。本日演奏される5声版コントラファクタは、この第6巻の音楽に《倫理的・宗教的な森》のラテン語の歌詞を組み合わせた、“VOCE オリジナル編曲版”である。歌詞のデクラメーションを考慮して、一部マドリガーレとはリズムを変えたり、ソロ版〈聖母の涙〉の旋律を取り入れたりして、ソプラノ声部を5声マドリガーレとは異なる旋律にした箇所もある。CとC#を減8度音程でぶつけるような、ほとんど「狂気じみた」不協和音や、ステイラー・コンチタート(興奮様式)と呼ばれる急速な同音反復によって、異様なまでのエネルギーが生み出され、その劇的な展開には鬼気迫るものがある。

さて、ここからはコントラファクタ以外の教会音楽について見ていきたい。1610年の有名な《聖母マリアの夕べの祈り(以下ヴェスプロ)》や保守的なス

タイルのミサ曲などで教会音楽家としても着実に歩み始めたモンテヴェルディは、1613年夏、ついにヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂楽長のポストに就任する。そして生涯を通じて、この名誉ある地位に留まることになるのだが、現存するモンテヴェルディの教会音楽は、残念ながらそれほど多いわけではない。

最も重要な曲集は、モンテヴェルディが70歳を過ぎた晩年に出版された《倫理的・宗教的な森》で、約30年の間に書き溜めてあった宗教作品を回顧的にまとめたアンソロジーとなっている。厳格なポリフォニー様式によるミサ曲や、コンチェルタート様式で書かれたさまざまな声楽・器楽編成の晩課のための詩篇曲(〈しもべらよ 主を称えよ *Laudate pueri*〉など)、そのほか賛歌やマニフィカト、〈サルヴェ・レジナ *Salve Regina*〉も含まれる。1643年の記録によれば、サン・マルコ大聖堂は約40人の歌手と12人の器楽奏者を抱えていたというから、ミサや聖務日課において、典礼のための演奏がさまざまな編成で華やかに執り行われていたことが想像される。「フランス風に *alla francese*」と記された〈主よ 感謝を捧げます *Confitebor tibi Domine*〉(詩編第110編)では、ソプラノのソロと5声の合唱が交代で歌われ、《ヴェスプロ》と同様、世俗曲において培われた装飾音型が効果的に駆使されている。古い様式も含むさまざまな要素が混在したスタイルは、同時代の他の作曲家やヴェネツィアの一般的な様式とも異なり、教会音楽史におけるモンテヴェルディの特異性を物語っている。

もうひとつの重要な宗教作品集が、作曲家の死後1650年に、ヴェネツィアの出版者アレッシンドロ・ヴィンチェンティが刊行した《4声のミサ曲、詩篇曲・・・》であり、その名の通り(4声のミサ曲)はここに収められている。現存する3曲のミサ曲(断章を除く)のひとつで、ここではオルガン声部が加えられている。不協和音の使用はごく限定的で、一見和声的には平板なようにも見えるが、伝統的なルネサンスの模倣様式においても彼が超一流の書き手であったことを改めて教えてくれる。

なお、この曲には、アニユス・デイの最後にミサ曲を締めくくる *Dona nobis pacem* の歌詞がなく、*Miserere nobis* で曲は終わっている。今回は試みとして、アニユス・デイを2回歌い、2度目は *Miserere nobis* の歌詞を *Dona nobis pacem* に置き換えて歌うという形をとることにした。なぜ最後の1セクションが欠落しているのかは定かではない。しかし、モンテヴェルディの弟子でやはりサン・マルコ大聖堂

で活躍したジョヴァンニ・ロヴェッタやアレクサンドロ・グランディなどのミサ曲でも、サンクトゥスやアニュス・デイの楽章が欠けているケースが見られることから、サン・マルコの典礼は、この頃には伝統的なローマ式の式次第のある程度犠牲にして執り行われ、儀礼的な側面が強くなっていったと推測され、このミサ曲の構成もそうした状況を反映しているのではないかと思われる。

さて、ここで再び世俗曲に話を戻そう。モンテヴェルディはその死までサン・マルコ大聖堂楽長の座を離れることはなかったが、生涯にわたってマドリガーレを書いている。モノディ様式においても時代の最先端を歩んだモンテヴェルディだが、「重唱によるマドリガーレ」という編成へのこだわりは強く、この分野においてもあらゆる試みを行っている。生前最後のマドリガーレ集となった第8巻《戦いと愛のマドリガーレ》(1638)は、世俗曲の集大成的な曲集である。この巻に収められた〈今や天地は静まり Hor che 'l ciel e la terra〉はペトラルカのソネット第129番を題材とした大規模な作品で、ヴァイオリン2本と通奏低音を伴って、夜の静寂をゆったりと描写的に表現する第1部とテノールの二重唱を軸に愛と苦悩を語る第2部が対照的に描かれる。卓越した情景描写は、カンタータの一場面を見ているようでもあり、高い演奏効果と豊かな情緒表現が光る晩年の傑作である。

70歳を過ぎてもなお作曲家の創作意欲が衰えることはなく、最晩年には2つのオペラ《ウリッセの帰還》(1640)、《ポツペアの戴冠》(1642)を遺している。このジャンルでもモンテヴェルディは常に新しい表現を模索し、言葉の細部にまで鋭い感性で切り込み、後世のオペラに大きな影響を与えている。

モンテヴェルディの音楽において、よりアヴァンギャルドな様式が開いたのは主としてマドリガーレなどの世俗作品やオペラであるが、同時に教会音楽作曲家としても、同時代の誰よりも実験的かつ冒険的であった。これは、彼が作曲家としてのキャリアを始め、自らの語法の土台を築いた若い日に、マントヴァで世俗曲を創作する機会が圧倒的に多かったことが影響していると思われる。より世俗曲に近い自由な様式が導入された晩課など聖務日課のための音楽、そしてローマへの配慮からより厳格な様式を守ったミサ曲と、一口に教会音楽と言っても、その書法は驚くほど多彩である。

ポリフォニーが次第に追いやられ、モノディ様式の新しい音楽が席卷していた過渡期ともいべきこの時代。モンテヴェルディに限らず、初期バロックの作曲家たちが、17世紀後半以降のバロックの作曲家と比較しても際立っている点は、彼らは何より“音楽による感情 (affetto) の喚起”に主眼を置いていたということである。そうした姿勢は声楽曲のみならず器楽曲においても貫かれている。喜び、憂い、希望、哀しみ、絶望、怒り・・・すべての感情がそこにはある。モンテヴェルディが没した後、1650年頃には、より均整のとれた作風を求めて音楽様式は変化していくが、おそらく音楽史上最も大胆に、ダイレクトな形で人間の感情や情念を表現しようとした、初期バロックの数十年間の煌めきは、500年後のわれわれの心をも揺り動かす魔力と引力に満ちているのである。

La Voce Orfica 杉村 泉

Laudate pueri Dominum a 5

Laudate pueri Dominum: laudate nomen Domini.
Sit nomen Domini benedictum,
ex hoc nunc, et usque in saeculum.
A solis ortu usque ad occasum,
laudabile nomen Domini
Excelsus super omnes gentes Dominus,
et super caelos gloria ejus
Quis sicut Dominus Deus noster,
qui in altis habitat,
et humilia respicit in caelo et in terra?
Suscitans a terra inopem,
et de stercore erigens pauperem:
ut collocet eum cum principibus,
cum principibus populi sui.
Qui habitare facit sterilem in domo,
matrem filiorum laetantem.

Gloria Patri, et Filio, et Spiritui Sancto.
Sicut erat in principio, et nunc, et semper,
et in saecula saeculorum. Amen.

O Jesu mea vita a 5

O Jesu, mea vita,
in quo est vera salus!
O lumen gloriae, amate Jesu,
O cara pulchritudo,
tribue mihi tuam dulcedinem
mellifluam gustandam.
O vita mea, o gloria coelorum,
Ah restringe me tibi in aeternum,
o gloria coelorum,
o Jesu, lux mea, spes mea,
cor meum, do me tibi,
o Jesu mea vita.
(Aquilino Coppini)

Salve Regina a 2

Salve regina, mater misericordiae;
vita dulcedo et spes nostra, salve.
Ad te clamamus, exules filii Evae.
Ad te suspiramus, gementes et flentes
in hac lacrimarum valle.
Eia ergo, advocata nostra,
illos tuos misericordes oculos ad nos converte.
et Jesum, benedictum fructum ventris tui,
nobis post hoc exilium ostende.
O clemens, o pia, o dulcis virgo Maria.

O stellae coruscantes a 5

O stellae coruscantes,
ornamenta coelorum,
quae cecae tenebras illuminatis,
O pure Sol, O luna,

しもべらよ 主を称えよ

しもべらよ 主を称えよ、み名をたたえよ
主のみ名は誉むべきかな
今からのち永遠に
日の出から日没まで
主のみ名は誉むべきかな
主はあらゆる人の上において
その栄光は天より高い
並ぶものなきわれらが主
天に住んでいながら
地上のわれらを忘れず
あわれな者を地べたから起し
はきだめから救い上げ
その者の支配者と並べて
平等に扱い
子のない女にも家庭を与え
子を持つ至福の母とするかたよ

父と子と聖霊に栄光あれ
この世の初めに在りし如く 時空を超え
永遠に アーメン

おお イエス、わが命よ

おお イエス、わが命よ
あなたこそ私のまことの救い
おお 栄光の光よ、いとしきイエスよ
おお 美しきそのかんばせ(顔)よ
あなたの慈しみを私に分けてください
溢れる蜜のようなあなたの慈悲を
おお 命よ、おお 天の栄光よ
ああ、私に永遠の絆をください
おお 天の栄光よ
おお イエス、私の光、私の希望よ
私の心よ この身をあなたに捧げます
おお イエス、わが命よ
(アクイリーノ・コッピエーニ)

サルヴェ・レジナ

天の後、あわれみの母よ
われらのいのち、喜び、希望よ、救いたまえ
旅路からあなたに叫ぶ、われらは追われたイブの子
嘆きながら泣きながらも
涙の谷であなたを慕う
われらのために執り成したまえ
憐みの眼差しをわれらに向け
祝福されたあなたの子イエスを
旅路の果てに示したまえ
おお、柔和で恵みあふれ、愛すべきおとめマリアよ

おお きらめく星よ

おお きらめく星よ
天を飾り
底知れぬ闇を照らすものたちよ
おお 明るい太陽よ、おお 月よ

O imagines almae illius quem adoro,
illius qui vos fecit,
et iubare lucentes,
benedicite Deo, et collaudate eum
qui vobis jubilatam
qui splendorem orbibus vestris dedit
vos eum laudate in aeternum.
(Aquilino Coppini)

Pianto della Madonna a 5

Iam moriar, mi Fili!
Quisnam poterit matrem consolari,
in hoc fero dolore,
in hoc tam duro tormento?
Iam moriar, mi Fili!

O Jesu, mi sponse, mi dilecte,
mea spes, mea vita!
Me deseris, heu, vulnus cordis mei!
Respice, Jesu, precor, matrem tuam,
quae gemendo pro te pallida languet;
atque in monte funesto,
in hac tam dura et tam immani cruce,
tecum petit affigi.
Mi Jesu, o Jesu mi, o potens homo, o Deus!
En inspectores, heu, tanti doloris
quo torquetur Maria.
Miserere gentis tecum
quae extincta sit, quae per te vixit.
Sed promptus ex hac vita discedes,
O mi Fili, et ego hic ploro.
Tu confringes infernum hoste victo superbo
et ego relinquo praeda doloris, solitaria et maesta.
Te, Pater almus, teque fons amoris
suscipiant laeti, et ego te non videbo.
O Pater, o mi sponse!

Haec sunt promissa Archangeli Gabrielis?
Haec illa excelsa sedes antiqui patris David?
Sunt haec regalia certa
quae tibi cingant crines?
Haecne sunt aurea sceptrum
Et sine fine regnum, affigi duro ligno
et clavis laniari atque corona?
Ah! Jesu mi, en mihi dulce mori!
Ecce plorando, ecce clamando,
rogat te misera Maria;
nam tecum mori est illi gloria et vita.

Hei! Fili, non respondes,
surdus es ad fletus atque querelas,
O mors, o culpa, o inferne!
Ecce sponsus meus mersus in undis!
Velox, o terrae centrum, aperite profundum
Et cum dilecto meo me quoque absconde!

おお 好ましいその姿は、私の慕う主があたえ
主がこれを造り
ひかり輝かす
主を祝福し、ほめたたえよ
主が星々をなめらかに巡らせ
主が天空に輝きをあたえる
なんじらよ 永久に主をほめたたえよ
(アクイリーノ・コッピエーニ)

聖母の涙

私は死んでしまいそうです、わが子よ！
誰もこの母を慰めることはできません
こんな是非もない悲しみのなかで
これほど酷い苦痛のなかでは
ああ、私は死んでしまう、わが子よ！

おおイエス、主が約束し、主に選ばれし我が子よ
私の希望、私の命！
あなたは私を、私の心の痛手を見捨ててるのですか、ああ！
待ちなさい、イエスよ、母は懇願しています
あなたのゆえに呻き、力なく青ざめ
このゴルゴタの丘で
堅く大きな十字架に
共に自分も磔にされたいと願っているのです
おお私のイエス、人の中でも力ある者、主よ！
さあ良くご覧なさい、これほどの苦悩に
マリアが身をよじらせて嘆くさまを
あなたを抱き嘆く者を顧みてください
あなたゆえに生き、死のうとさえ思う私を
なのにあなたは去ろうとし
私は悲嘆のうちに残される、おお我が子よ！
あなたは地獄の敵を打ち砕き、勝利し乗り越えてゆき
私は悲しみの虜となり、独り涙に沈んでいます
慈しみ深い父が溢れる愛と歓喜のうちに
天へとあなたを抱きあげ、あなたは私には見えません
おお父よ、そしてわが約束の子よ！

これが大天使ガブリエルのいう約束ですか？
これが父祖ダビデの、あの高貴な座なのですか？
王にふさわしい花の冠は
あなたの頭（こらへ）を飾っていると？
これが黄金の王笏で
終わりなき王位の象徴ですか、この堅い木に
王冠にふさわしい者を打ちつけたこの釘が？
何ということ！私のイエスよ、私にも甘味な死を！
この嘆きを見、この叫びを聞いてください！
哀れなマリアはあなたに祈ります
あなたの死が天上の栄光、永遠の命と共にあれと

我が子よ、あなたは答えない
涙し嘆く私にただ押し黙るばかり
おお死よ、罪深き者よ、地獄に住む者よ！
ご覧なさい、わが約束の子が私の涙に濡れるのを！
おお大地よ、直ちに淵をひらき
私も愛する子と共に深みへ沈めておくれ！

Quid loquor? Quid spero, misera?
Iam quid quaero, o Jesu mi?
Non sit quid volo, sed fiat quod tibi placet!
Vivat maestum cor meum
pleno dolore pascere, Fili mi, Matris amore!
(Anon.)

Confitebor Terzo alla francese a 5

Confitebor tibi Domine in toto corde meo:
in consilio justorum et congregatione.
Magna opera Domini:
exquisita in omnes voluntates ejus.
Confessio et magnificentia opus ejus:
et justitia ejus manet in saeculum saeculi.
Memoriam fecit mirabilium suorum,
misericors et miserator Dominus:
escam dedit timentibus se.
Memor erit in saeculum testamenti sui:
virtutem operum suorum annuntiabit populo suo:
Ut det illis haereditatem gentium:
opera manuum ejus veritas et judicium.
Fidelia omnia mandata ejus:
confirmata in saeculum saeculi:
facta in veritate et aequitate.
Redemptionem misit populo suo:
mandavit in aeternum testamentum suum.
Sanctum et terribile nomen ejus:
initium sapientiae timor Domini.
Intellectus bonus omnibus facientibus eum:
laudatio ejus manet in saeculum saeculi.

Gloria Patri, et Filio et Spiritui Sancto.
Sicut erat in principio, et nunc, et semper,
et in saecula saeculorum. Amen.

Ardebat igne puro a 5

Ardebat igne puro, igne suavi,
Dei sui Maria Virgo, et pectore et nutriebat
sacrae flammae scintillas.
Liquefiebat et animo prae nimio amore
et haec ex ore dedit:
Domine sancte, domine Deus meus,
propera mittere filium tuum ad nos,
qui donet vitam et a morte nos
eripiat aeterna.
Ah, descendat in terram.
(Aquilino Coppini)

Messa a quattro voci

Kyrie

Kyrie eleison.
Christe eleison.
Kyrie eleison.

何を言っている？何を望んでいるのか哀れな私は？
あなたの望みは何ですか？おお私のイエスよ！
たとえ何も望まなくても、私はあなたを喜ばせたい！
私は生きながらえましょう、辛く苦しい心のまま
溢れる悲しみを糧として。息子よ！私の愛する我が子よ！
(作者不詳)

主よ 感謝を捧げます

主よ 私は心を尽くし あなたに感謝を捧げます
正しき者の集いにて 公会の場において
主の御業は この上なく素晴らしく
主の企ては すべてが卓越し
その成果は 確実かつ見事であり
主の正義は 世々に続く
主は奇跡の御業（みわざ）を人の心に刻む
主は あわれみ深く慈悲にあふれ
主を畏れる者に糧をあたえ
その契約を永遠に忘れず
御業の威力を主の民に教えてくださる
主はこのようにして 永久に受け継ぐべき事を示す
主の行いは理にかなない 洞察に満ちている
主のあらゆる命令は誠意にもとづき
世々に確固としてゆるぎなく
的確に 節度をもって成し遂げられる
主は人々のために救い主をおくり
永遠の契約をゆだねてくださる
主のみ名は ほむべきかな
主を畏れることは 知恵のはじまり
主の行いはあらゆる人にとって良き知恵となり
主への感謝は とこしえに続きます

父と子と聖霊に 栄光あれ
この世の初めにそうであったように 時空を超え
永遠に アーメン

処女マリアは聖なる火をおこし

処女マリアは聖なる火をおこし、心地よく燃えあがらせ
その手で火をかき、ほど良く炎を保ちつつ
具合の良い熾火（おきび）となす
やさぐれる情念の焰（ほむら）を制し
ひたむきに祈りを捧ぐ：
主よ、わが主よ
急ぎて我らに主の御子を遣わしたまえ
主の御子は永遠のいのちを我らにあたえ
我らを死から解き放つ
ああ、遣わしたまえ、この世に降りてくださる御子を
(アクイリーノ・コッピニ)

4 声のミサ曲

キリエ

主よ あわれみたまえ
キリストよ あわれみたまえ
主よ あわれみたまえ

Gloria

Gloria in excelsis Deo.
Et in terra pax hominibus bonae voluntatis.
Laudamus te. Benedicimus te.
Adoramus te. Glorificamus te.
Gratias agimus tibi
propter magnam gloriam tuam.
Domine Deus, Rex caelestis, Deus Pater omnipotens.
Domine Fili unigenite Jesu Christe.
Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.
Qui tollis peccata mundi, miserere nobis.
Qui tollis peccata mundi, suscipe deprecationem nostram.
Qui sedes ad dextram Patris, miserere nobis.
Quoniam tu solus sanctus. Tu solus Dominus.
Tu solus altissimus, Jesu Christe.
Cum Sancto Spiritu in gloria Dei Patris. Amen.

Credo

Credo in unum Deum.
Patrem omnipotentem, factorem caeli et terrae,
visibilium omnium, et invisibilium.
Et in unum Dominum Jesum Christum,
Filius Dei unigenitum.
Et ex Patre natum ante omnia secula.
Deum de Deo, lumen de lumine,
Deum verum de Deo vero.
Genitum, non factum, consubstantialem Patri:
per quem omnia facta sunt.
Qui propter nos homines,
et propter nostram salutem
descendit de caelis.
Et incarnatus est de Spiritu Sancto
ex Maria Virgine: Et homo factus est.
Crucifixus etiam pro nobis
sub Pontio Pilato, passus, et sepultus est.
Et resurrexit tertia die, secundum Scripturas,
Et ascendit in caelum: sedet ad dexteram Patris.
Et iterum venturus est cum gloria
judicare vivos et mortuos:
cujus regni non erit finis.
Et in Spiritum sanctum Dominum,
et vivificantem:
qui ex Patre Filioque procedit.
Qui cum Patre, et Filio
simul adoratur, et conglorificatur:
qui locutus est per Prophetas.
Et unam, sanctam, catholicam
et apostolicam Ecclesiam.
Confiteor unum baptisma
in remissionem peccatorum.
Et exspecto resurrectionem mortuorum.
Et vitam venturi saeculi. Amen.

グローリア

天のいと高きところには神に栄光
地には善意の人に平和あれ
われら主をほめ 主を讃え
主を拝み 主を崇め
感謝したてまつる
主の大いなる栄光のゆえに
神なる主 天の王 全能の父なる神よ
主なるおんひとり子 イエス・キリストよ
神なる主 神の子羊 父のみ子よ
世の罪を除きたもう主よ 我らを憐れみたまえ
世の罪を除きたもう主よ 我らの願いを聞きいれたまえ
父の右に座したもう主よ 我らを憐れみたまえ
主のみ聖なり 主のみ王なり
主のみ いと高し イエス・キリストよ
聖霊と共に 父なる神の栄光のうちに アーメン

クレド

信じます 唯一の神を
天と地の父 天と地の創造主
見ゆるもの見えざるものすべての創り主を
唯一の主イエス・キリスト
神のひとり子を（信じます）
よろず世に先立ちて父より生まれたり
神よりの神 光よりの光
まことの神よりのまことの神
造られずして生まれ 父と一体なり
然りしこうして万物は創られたり
われら人類のため
われらを救わんために
天より降り
聖霊によりて肉をうけ
処女マリアより生まれ 人となりたまえり
十字架につけられしはわれらのためになり
ポンシオ・ピラトの時に苦しみをうけ葬られたまえり
聖書にありしごとく三日目によりみがえり
天に昇りて 父の右に座したもう
しかして栄光のうちにふたたび来たりたもう
生ける人と死せる人を裁くために
主の国は終わることなし
主なる聖霊を信じます
生命の源
父と子とより出でしもの
父と子とともに拝まれ
ともに尊まれん
預言者により語られし如く
唯一 聖 公
使徒継承の教会を（信じます）
唯一の洗礼を認めます
罪の赦されんためなる
待ち望む 死者のよみがえりと
来世の生命とを アーメン

Sanctus

Sanctus, sanctus, sanctus
Dominus Deus Sabaoth.
Pleni sunt caeli et terra gloria ejus.
Hosanna in excelsis.

Benedictus

Benedictus qui venit in nomine Domini.
Hosanna in excelsis.

Agnus Dei

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
Dona nobis pacem.

Hor che 'l ciel e la terra a 6

Hor che 'l ciel e la terra e 'l vento tace
e le fere e gli augelli il sonno affrena,
Notte il carro stellato in giro mena
e nel suo letto il mar senz'onda giace,
veglio, penso, ardo, piango; e chi mi sface
sempre me'è innanzi per mia dolce pena:
guerra è il mio stato, d'ira e di duol piena,
e sol di lei pensando ho qualche pace.

Così sol d'una chiara fonte viva
move il dolce e l'amaro ond'io mi pasco;
una man sola mi risana e punge;
e perchè il mio morir non giunga a riva
mille volte il dì moro e mille nasco,
tanto da la salute mia son lunge.
(Francesco Petrarca)

サンクトゥス

聖なるかな 聖なるかな 聖なるかな
万軍の神なる主
主の栄光は天地に満つ
天のいと高きところにオザンナ

ベネディクトゥス

ほむべきかな 主の名によりて来るもの
天のいと高きところにオザンナ

アニウス・デイ

神の子羊 世の罪を除きたもう主よ
我らを憐れみ給え
神の子羊 世の罪を除きたもう主よ
我らを憐れみ給え
神の子羊 世の罪を除きたもう主よ
我らに平和を与えたまえ

今や天地は静まり

今や天地は静まり風もなく
鳥や獣も深く眠る
きらめく星座の馬車で夜は巡り
海も静かに身を横たえる
だが私は眠られず、乱れ身悶え涙する
あなたは私を破滅へ導き、甘く私を苦しめる
こうして怒りと悲嘆がせめぎ合うのに
あなたを想う時、私は安らぎすら覚える

このように、同じ一つの泉から
歓喜と悲哀が生まれ私の糧となる
おなじ人の手が私を癒し傷つけるが
この苦しみが結末の彼岸に辿りつかぬよう
私は一日に千回も死んでは生きかえる
わが身を救いから遠ざけたまま
(フランチェスコ・ペトラルカ)